

ゆうこみゆき。



なるほどアイヌ文化トーク ソッコ de ソッコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた
本田優子(札幌大学副学長)と
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、
その魅力をソッコ(=お便り)形式で語り合います。



今月のテーマ トイタ(農耕)



イラスト/安田千夏

「アイヌって狩猟採集民族だよな。農耕はなかったんでしょ?」って訊かれることがあります。いえいえ、ヒエ。アフ・キビなどの穀物は古くから畑で栽培されてました。だからこそトイタ(トイ土/畑、タニを耕す)というアイヌ語があるんでしょうね。江戸時代末頃の文献には、ブと呼ばれる足の高い倉に穀物をぎっしり保存している豊かなアイヌがいたことも紹介されているの。穀物の他にも、豆やアタネと呼ばれるカブの一種が江戸時代から栽培されてたし、ジャガイモは18世紀末、下北半島よりも早く北海道のアイヌ社会に持ち込まれたんだって。

そうはいつても、「鹿の角や木の枝で土を耕し、肥料も使わない原始的農業」ってイメージが強いよね。実際、アイヌの農耕についてまとめた本にもそういう感じで書かれています。でも、最近の考古学の成果から、どうやら違った姿も見えてきたの。少なくとも17世紀前半の地層から、畝の長さが12メートルもある大規模な畑の跡が見つかり、鉄製農具の使用や人糞を肥料として撒いたこともわかったんだって。こういう畑の跡は、一か所だけじゃなく十数か所も次々に確認され、一気にアイヌの農耕イメージが変わったみたい。もちろんまだわからないことも多いけど、なんだかワクワクしちゃっ。



「農耕業はすこぶる幼稚なもので…農業としての価値を疑わせる…」(「アイヌの足跡」一九二四)など、これまでアイヌの農耕は取るに足らぬものとして紹介されてきたので、畝を切った畑跡はインパクトあったよね。自然が豊かで足る状態があったからこそ農耕が副次的と捉えられてきた観があるけど、アイヌの栽培作物は自家消費が主、それと専業農家を比べれば規模や道具、技術においても違いがあつて当然で、それを比較して「幼稚なもの」とするのは違うよね。

畑を耕すのは女性の仕事。シッタフと呼ばれる踏み鋤や鋤、鎌、臼、堅杵や箕など畑作や穀物の処理に関する道具は女性が使い、豊穣を願う「それ踊れ、それ時け、それ撒き散らせ」などと歌い、種蒔きから土掛け、除草や刈入れと農耕に関する一連の動作を取り入れた舞踊など農耕に関するものは女性によって伝えられてきたよね。物語にも穀物のヒエとアフはウムレクハルカムイという夫婦の食糧神であるとされる話やその起源などについて語られ、そのヒエ、アフで造るお酒はカムイノミ(神々への祈り)や先祖供養には欠かせないもの。女性の役割や精神世界、アイヌの生業を考える上でも農耕は重要な位置にあるっていえるよね。

